

多数決を有効に活用するために

徳島県立城南高等学校 3年 友川 翔太

論点

多数決は便利だ。議会でも多用されるこの方式は、私たちも幼いころから知っている。ことあるごとにクラス内、友人間や家族間でこれを利用してきた。しかし、多数決は万能だと思いついていないだろうか。多数決は便利だが欠点もある。とはいえ私たちが集団で生活している以上、何かを決めることは必要だ。多数決を有効かつ効率的に活用するためにはどうすればよいのだろうか。

多数決の特性

初めに考えるのは多数決の特性である。多数決がどういった場合に最も効力を発揮するのか。多数決が集団に与える影響にはどういったものがあるのか。そして多数決の利点と欠点とはなにか。これらの要素から「多数決を最も有効に活用する方法」を提案する。

ある議題における賛否の結果（集団を 100 人とする）

ケース	賛成者	反対者	結果
①	100 人	0 人	賛成
②	51～99 人	49～1 人	賛成
③	50 人	50 人	未確定
④	49～1 人	51～99 人	反対
⑤	0 人	100 人	反対

ケース①、⑤は理想の形態である。集団内での不和なしに方針が決まる。

ケース②、④でも方針を決めることはできる。だが少数派に不満が生じてしまう。重要な議題であれば集団の秩序に悪影響を及ぼしかねない。

ケース③では結論が出せない。奇数人での投票ならこの事態は回避できるが、偶数人になるとそうはいかない。

以上より、同数投票になる可能性がある以上断定はできないが、結論を急ぐ際に多数決は有効だと言える。

多数決が良い方向に働いた例として国際連合がある。前身となる国際連盟では議決は全会一致制を採っていた。そのため一国でも反対票を投じれば議案は可決されなかった。これにより国際連盟はなかなか動きがとれず、国際の平和及び安全を維持するという理念を

果たせずに解散した。これに対して国際連合では多数決を原則としており、議題の可否は投票さえすれば決めることができる。これにより経済制裁や武力制裁を加えることが以前よりも簡単になった。これは多数決が「結論を出すこと」を目的とした場合有効であることを示す。

これに対して「集団の秩序を守ること」を望む場合、多数決が有効とはいいがたい。不満は集団の結末を緩めてしまうからだ。この不満の解消には話し合うこと以外方法がない。ただし、不満の矛先が個人に向かないようにする方法はある。それが秘密投票だ。秘密投票ならば「個人間の恨み」を防ぐことができる。

この例が普通選挙である。秘密投票は憲法に保障されており、日本の普通選挙はこの原則に従っている。これによって多数決で意思表示をする際、他人の顔色を窺ったり人目を気にしたりする必要がなくなる。これは本人の意思による投票にもつながる。

これらの観点から多数決は、

- ・素早く結論を出すことに適している。
- ・秘密投票によって投票者の真意に基づく投票がとれる。
- ・少数派の意見を反映させることはできない。

といった特性を持つと言える。

多数決の矛盾

次に考えるのは、多数決が複雑化した場合に生じ得る問題についてである。

ある5人が食事を和食にするか洋食にするか、多数決で決めることにした。5人は3つの観点（ポイント）において和食か洋食かを選び、総合評価を下す。その結果が下図のようになった。

	お酒に合う	雰囲気がよい	コスパがよい		総合評価
Aさん	和風	和風	和風	→	和風
Bさん	和風	和風	和風	→	和風
Cさん	和風	洋風	洋風	→	洋風
Dさん	洋風	和風	洋風	→	洋風
Eさん	洋風	洋風	和風	→	洋風
	↓	↓	↓		
各ポイントの評価	和風	和風	和風		

引用<ニッセイ基礎研究所>

図を見ると、総合評価では洋食が多数派だ。単純に多数決をとれば2人対3人で食事は洋食になるだろう。

ここで、AさんとBさんが次のような提案をした。

「和食と洋食を選ぶにはいくつかポイントがある。ポイントごとに多数決をとって、多くのポイントで勝るほうを選んではどうか。」

全員がこの案を受け入れたので、ポイントごとに多数決をとって評価した。このとき、いずれのポイントにおいても3人対2人で和食が多数となる。この結果5人は和食を食べることになった。AさんとBさんの思惑通りになったわけである。

これは「オストロゴルスキーのパラドクス」と呼ばれるもので、多数決による選挙制度が必ずしもうまく機能しないという例として有名だ。個別の政策での多数派と、政党選択での多数派が異なる場合があるということの事例としてよく取り上げられる。

ここからわかるのは、争点を掘り下げることによって、多数決の結果を動かすことが可能な場合があるということだ。これにより、少数派が多数派となり得るという矛盾を抱えていることになる。

多数決の弱点

上記の問題点に加え、集団自体の特徴が多数決の結果にどう関わるのかを考える。

「5階建てのマンションで、エレベーターの改修費が議論となった。普段エレベーターを使わない1階の住人は負担を拒んだが、5階の住人は費用の均等割を主張した。多数決で決めることになり、過半数ではわだかまりが残るので5分の4が賛成する案に従うことになった。」 引用<中日新聞夕刊コラム「紙つぶて」>

ここでの集団はマンションの住人だ。このとき全ての階の住人の数はそれぞれ等しいものとする。

果たして結果はどうなるだろうか。当然2階以上に住む住人は自分たちの負担が少なくなる均等割に賛成するだろう。しかし、1階の住人たちにとっては不満が残る結果となるのは明らかだ。

この例からわかるのは多数決が集団の持つ特性に依存するということである。集団の中にも派閥が存在することは多々ある。この例では「エレベーターを使う人」と「エレベーターを使わない人」だ。多数派である「エレベーターを使う人」にとって多数決は自らの意見を確実に通す手段になる。このように「結論を出すこと」が目的の場合でも、多数決

をとることが特定の派閥に有利になるなら、多数決はとるべきではない。

以上より、多数決には下記の特性があるといえる。

- ・ 集団内の特性により結果が明らかな場合、多数決は適さない。
- ・ 少数意見を反映できなければ不満を生む可能性が高い。

多数決を有効に活用するために

これまでのことを踏まえ、集団の特性から決をとらずとも結果が明らかな場合は多数決を用いるべきではない。

また、多数決を最も有効に使うことができるのは「素早く結論を出すことを主な目的とするとき」である。このとき、投票者に周りの目を意識させないために「秘密投票」であることが重要である。しかし、これだけでは「少数意見を反映できない」という欠点を補うことができない。

先のマンションの例ならば「使わないエレベーターのために費用を負担しなければならないという不満」がある。この不満は話し合いによってしか解決できない。

もし多数決を行わず、初めから住人全員で話し合っていたならどうなっていただろう。大勢が意見を出し合い、それを整理し議論しなければならない。様々な意見を取り入れることは可能かもしれないが、時間がかかり、複雑化してしまうことは否めない。

多数決をとれば不満が出る。この不満を解消するための話し合いにおける争点は「1階の住人の負担額」となる。これは、「多数決をすることによって話し合いの争点が定まった」と言い換えられないだろうか。また、多数決の特性から、「結論に対する不満を素早く出せた」ともいえる。加えて議論の方針を定めるためなら、「秘密投票」である必要もなくなるため、票を集計する時間が省かれ効率もあがる。そういった単純な多数決なら矛盾も生じない。

以上より、多数決の欠点は話し合いの実施によって利点に変わると言える。利点はそのままに、欠点を補うことができるのだ。多数決は決をとることではなく、話し合いの争点を定めることに用いられるべきだ。

これが「多数決を最も有効に活用する方法」である。

参照

- ・ 広辞苑
- ・ ニッセイ基礎研究所
<https://www.nli-reserch.co.jp/detail/id=69289>
- ・ 中日新聞夕刊コラム「紙つぶて」野村修也氏著